

## 2017年度卒業生 波

「先生、〇〇点でした・・・。」公立高校入試A日程の行われた夕方、自己採点をして私に点数を報告してくれた彼女の電話越しの声は今にも消え入りそうで、心なしか震えているようにも聞こえた。「えっ、まさか・・・！」その点数を聞いた時私は心の中で叫び、一瞬呼吸が止まった。8回の直前模試練習でも一回も取ったことのない低い点数。自宅での過去問演習でももちろんない。合格に必要な目標点数を常に20～30点超えていた。それなのに・・・。

「まだ、分からないからね。合格できるよう祈っていようね。明日の面接、しっかり受けておいで。」最後にそんな言葉を絞り出して電話を切ったが、私自身動揺は止まらなかった。“心配していたことが起こってしまった。内申でカバーしきれんのだろうか・・・。”

想定していたことではあった。“波がある”—そんな言葉を聞いたことがないだろうか。好調な時と不調な時の差が激しいことである。勉強において、まさに彼女はこれだった。

1年の1学期末に他塾から変わって彼女は入塾してきた。当塾のやり方に慣れるのには時間がかかった。他のみんながクリアしている計算力や英語の文法を基礎から鍛え直すことも必要だった。でも、そんな大変な状況も、彼女は持ち前の明るさと一生懸命さで乗り越えていった。確実に力は伸びた。だが、なぜかなかなか学校の定期テストで思うような点数が取れなかった。今思うと、この頃から本番のテストに対して必要以上に緊張する体質だったのかもしれない。

変化が出てきたのは2年の半ばから。順調に点数が取れて、ぽんと学年順位を上げてきた。“よかった。やっと結果が出てきた”と喜んだのもつかの間、次の次のテストではまたガクッと落とす。喜んだりがっかりしたり、そんなことが3年になっても続いた。1番調子が良かったのが夏の模試。すばらしい偏差値だった。実力が発揮できた結果である。ところがその後、志望校を上げようと本人も親御さんも思い始めた矢先に受けた会場受験の秋の模試で、彼女は緊張のあまり頭が真っ白になった。夏より14下げた偏差値。まさに波である。最後の冬の模試でまた偏差値を高く戻し、2ランク上の高校の合格可能性も80%を超えたが、志望校を上げることはやめておいた。こんな時は一番低い波の時を想定しなければならないからである。

本番は今までに見たことがないくらい低い波が来た。それでも彼女を合格に導いたのは、真面目にやってきて得た内申と体にしみこんでいる実力だった。頭が真っ白になる中でも絞り出した答えが自分に合格をつかませたのだ。高蔵寺高校で彼女は今、元気に明るく過ごしている。力は十分にある。大丈夫。次の受験も絶対に超えられる。自分を信じ自信を持って進もう！